

---

# アメのアメ

夜鷹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アメのアメ

### 【Nコード】

N5349K

### 【作者名】

夜鷹

### 【あらすじ】

ある雨の日の、小さな物語。

(前書き)

初投稿です。読んでいただけたら幸いです。

「知ってるかい？ 一番始めに落ちた雨粒を掴むと、それが飴玉に変わるんだよ」

そう言って青年は、目の前に手を掲げ、手のひらを上に向ける。空には、今にも泣き出しそうな雲が一面を覆っていた。今の私のようだ。

すると、青年が手を出すのを待っていたかのように、どんよりとした雲から雨が降り出した。その最初の一滴が、青年の手のひらに落ちる。

青年はまるで、始めからそうなることがわかったかのように、それを受け止める。そして、手を包み込むと、次の雨粒が落ちてくる前に、その手を引っ込めた。

そのすぐ後に、土砂降りの雨が勢いよく降り出した。空が泣き出してしまったかのような雨だったが、私はそれよりも今引っ込めたばかりの青年の手に気を取られていた。

青年は隣りにいる私の方に向き直り、しゃがんで私の視線の高さに合わせると、握り込んだ手を私の前に出した。さつき雨粒を掴んだ方の手だ。

まさか雨粒が飴玉に変わるなんて。そんな気持ちがないわけではなかった。でも私は、自然と期待していた。

青年が手を開くと、そこには飴玉が一つ乗っていた。私は驚嘆して、青年と飴玉を交互に見る。まるで絵本に出てくる魔法使いみたいだ。

そんな私を、青年は優しそうな笑顔で見ていた。

不意に青年が、はい、と言って飴玉を私の目の前に持ってくる。

私は顔を上げ青年に、いいの？、と聞くと、青年は、うん、とうなづいてくれた。

私は笑顔で嬉しさを表し、青年の手から飴玉を受け取ると、すぐにそれを口に入れた。

不思議な味だった。甘かったり、しょっぱかったり、辛かったり、酸っぱかったり。舌で転がす度にいろんな味が出てきて、でもそれらが全て混ざり合い、見事な調和を作り出していた。

この間母から教わった、ほっぺが落ちてしまう、という言葉を出す。本当にほっぺが落ちてしまっくらいおいしかった。

そのときの飴玉の味は、今はもう忘れてしまった。

あれから二十年も経った今から思えば、何とも可愛らしい記憶だろう。

雨粒一つから飴玉ができるはずがない。あれは多分、私がちよつと目を放した隙に、ポケットから飴玉を取り出したに違いない。

しかも、“雨”を“飴”に変えるだなんて。駄洒落もいいところだ。

ただ、あの飴玉の味が未だに思い出せない。不思議な味だったことは覚えているけれど、そこまで。きつとすごく珍しい味だったのだろう。あれと同じ味の飴を、私は知らない。まあ、子供の頃の記憶だから、あてにならないけれど。

とそこでちょうど、電車がプラットフォームに滑り入ってきた。

私は思考を切り上げ、空気の抜ける音と共に開いた乗車口へ、人の流れに乗って入る。

座席に座るのは、入る前に車窓を覗いてすでに諦めている。入つてすぐ、向かいの乗車口に寄って、近くの手摺に掴まりながら閉じられたままのドアに寄り掛かった。

そういえば、あのあとしばらくして青年はいなくなり、入れ替わりに母親が来て、迷子の私を迎えに来てくれたんだっけ。

あのとき私は、駅前で母親と別れて迷子になり、駅の出入り口の

前で必死になって母親を探していた。

途方に暮れて、今にも泣き出しそうな私のところに、あの青年が現れたんだ。

青年は私から事情を聞くと、大丈夫だよ、きっとお母さんすぐ来るから、それまで良い子で待ってよう、そう言ってその後ずっと、私の隣りにいてくれたんだっけ。

青年には失礼だけど、普通迷子は駅員とかに預けないだろうか。駅の入口で母親が探しに来るまで待っているというのは、常識的にどうかと思うが。

そういえば、あの青年は今どうしているだろう。あれから二十年も経っているから、今ごろは四十代前後のおじさんか。会っても私のことなんて覚えていないだろうし、そもそもどこの誰だかもわからないわけだし。

ふと、ドアの窓から外を覗くと、灰色の空が見えた。

この電車、終点近くになると線路が地下から地上へ出るようになってる。地下鉄なのになぜ、わざわざ地上に出るのだろう、不思議だ。

空には、今にも泣き出しそうな雲が一面を覆っていた。今の私のようだ。

子供の頃の思い出が、幾分か気分を軽くしてくれたが、今なお私の心は、雲が重く垂れ込んでる。

末期癌の患者だった。三カ月、必死に癌と闘ったが、今朝、亡くなった。

私が担当していた患者だった。

余命いくばくかも無いと知りながらも、その人は最後の最後まで諦めなかった。私もそばで必死に応援した。けれど、結局逝ってしまった。

どんなに頑張っても、最後に死は訪れる。理解したつもりだった。

けど、どんなに死を理解し受け入れても、この虚無感だけは慣れたくない。この空虚な気持ちにだけは、どうしても慣れたくない。悲しみを通り越した虚無感、私の心を蝕み、からっぽにしている。

電車が止まった。終点だそう。アナウンスがそう告げている。

ドアが開き、乗客が皆、電車から降りていく。乗客のほとんどが降りたところになってようやく、私は重たい身体を引きずって、電車を降りた。

とりあえず、家に帰ったら美味しいものを食べよう。作るのが面倒だから、出前でも取ろう。

そう心に決めて、階段を下りていく。

乗ったときは駅は地下にあっただはずなのに、やはり不思議だ。

階段を下りた先の改札を抜け、入口の前で止まって空を見上げる。相変わらず重そうな雲だ。家に着くまで降らないといいけれど。不意に、患者さんの最後の笑顔が、頭を過ぎる。同時に、涙が込み上げてきた。

ダメだ。今泣いたら、抑え切れない。気持ち、心が、壊れる

そのとき。

「知ってるかい？ 一番始めに落ちた雨粒を掴むと、それが飴玉に変わるんだよ」

横から、声がした。

振り向くと、青年が一人、空を見上げて立っていた。

あのときと同じ、あのときの姿のままの、あのときの青年が、そこにいた。

私は驚き、固まってしまった。直前のこともあって、頭が働かない。

青年は一度、こちらを見て微笑むとと、またすぐ視線を空へと戻す。目の前に手を掲げ、手のひらを上に向ける。

すると、青年が手を出すのを待っていたかのように、どんよりとした雲から雨が降り出した。その最初の一滴が、青年の手のひらに落ちた。

青年はまるで、始めからそうなることがわかったいたかのように、それを受け止める。そして、手を包み込むと、次の雨粒が落ちてくる前に、その手を引っ込める。

そのすぐ後に、土砂降りの雨が勢いよく降り出した。

空が泣き出してしまったかのような雨だったが、私はそれよりも、今引つ込めたばかりの青年の手に、というよりも、青年自身に気を取られていた。

青年はこちらに向き直ると、再び微笑んだ。

「大きくなつたね。それに、きれいになった」

青年が話しかけてきたのだとようやく理解し、私は慌てて口を開いたが、何を喋っていいのか分からない。あ、だとか、う、だとか、言葉にならない声しか出ない。

そんな私を気にすることなく、青年は目の前に握り込んだ手を出した。雨粒を掴んだ方の手だ。

握り込んだ手を広げると、そこには飴玉が一つ乗っていた。あのときと同じだ。

意識して見てはいなかったが、青年は現れてから一度も、手をポケットには入れなかった。

そしてやはり、あのときと同じように、はい、と言って、飴玉を私の目の前に持つてくる。

私は頭が混乱していて、何をしたらいいのかわからなかったが、身体が無意識の内に動いていた。青年の手から飴玉を受け取り、口には入れず、手に乗せてそれを観察した。



飴玉は、きれいで透明な無色だった。ガラス玉みたいだ。

「大丈夫だよ。きつと、大丈夫」

そう、聞こえた。

顔を上げると、青年はいなくなっていた。辺りを見回すが、青年の姿はなかった。

まるで夢か幻だったみたいに、青年の姿は跡形もなく消えていた。けど、私の手の上に乗っている飴玉は、まだそこにあった。その飴玉を、思い切って口に入れる。

不思議な、そして、懐かしい味だった。甘かったり、しょっぱかったり、辛かったり、酸っぱかったり。舌で転がす度にいろんな味が出てきて、でもそれらが全て混ざり合い、見事な調和を作り出していた。

ほっぺが落ちそうなくらいおいしい。

顔を上げる。まだ雨は降っている。思い切って、足を踏み出した。

三月の雨が、私に降り注ぐ。冷たくて気持ちいい。

傘を刺していないので、一分と経たず濡れになったが、それほど気にならなかった。

大丈夫。きつと、大丈夫。

飴玉の味は、もう忘れない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5349k/>

---

アメのアメ

2010年10月8日15時07分発行